

天にいます父の御旨を行う者

主イエスは、羊の衣をまどって私たちの中に入り込んでくる「偽預言者」を警戒せよと言われた（マタイ7:15）。なぜ警戒しなければならないか。それは、「本物の預言者」と「偽預言者」とは、ぶどうと茨（いばら）、いちじくとあざみが似ているように（16節）あまりにもよく似ていて、見分けにくいという理由からである。宝石でもそうであるように、本物の価値が高ければ高いほど、偽物も区別しがたいほど巧妙になるものである。

主は、21節以下で、偽預言者の特徴を述べる。その特徴の第1は、彼らもまた、キリストに向って「主よ、主よ」と呼びかけて礼拝し祈る（20節）。しかし、キリストに向って「主よ、主よ」と口にする者が、必ずしも正統的教師であるのではなく、その教えが正しいわけではない。モルモン教やエホバの証人、統一教会のような今日の異端でも「主よ、主よ」と呼ぶのである。

第2に、偽預言者もまた、キリストの名によって預言し、悪霊を追放し、奇蹟さえ行う（22節。マタイ24:23以下参照）。しかし、不思議なしるしを行うからといって、必ずしもその人が正しい教師であり、その教えが正しいというわけではない。異端や異教徒でさえも不思議なしるしを行うのである。奇蹟は、それを行う者の正統性の絶対的保証とはならないのである。

主イエスは続いてこう言われた。「わたしに向って、ただ形の上で“主よ、主よ”と呼ぶ者が天国に入るのではなく、或いは、不思議なわざをする者が入るのではなく、ただ“天にいますわたしの父の御旨を行う者”だけがはいるのである」と。すなわち、神の御旨、神の福音の言葉を、たとい、その道がいかに狭く、細く、きびしくとも（13～14節）、曲げもせず、水増しもせず、割引もせず、その通りに信じ、その通りに教え、その通りに従って生きる、そのような人こそは、神の国の祝福にあずかることのできる人である。

ところで、これらの言葉は、偽預言者の欺瞞性に対する警告として語られたものであるが、同時にそれは、正しい信仰に立っていると自認する私たちに対する、主イエスからのチャレンジの言葉でもあることを覚えてほしいと思う。

信仰とは神の言葉を聞くことだけでなく、神の言葉に生きること、聞く言葉に信頼し、忠実に従って生きることであることを主はここで強調された。私たちは、日々の生活の中で、本当に「天の父の御心を行う者」となっているか、「主よ、主よ」と呼んでいる者にふさわしく「命に至る道」を一心に生きているか、そのことを静かに反省するものでありたいと思う。偽りの教えに惑わず惑わされずひたすらに忠実に主に仕えていく者になりたいと思う。